

# 神田和泉屋だより

天と地の恵みと  
暖かい人の心で  
醸し出される  
本物の酒

## お酒の話

ビール券姿消す  
4月21日の産経新聞  
にこんな記事があり  
ました。

アサヒビールが来  
年一月からビール、  
発泡酒の小売希望価  
格を廃止する「オー  
プン価格」を導入す  
ると同時に「ビール  
券」の販売を取りや  
めると発表。キリン  
ビールもすでにオー  
プン価格導入を発表、  
ビール券の販売中止  
を検討中。またサツ  
ポロビール、サント  
リービールも追従す  
るとみられる。とい  
う記事です。

激しい安売り合戦  
で希望小売価格の意  
味がなくなっている  
現状からメーカー出  
荷価格だけを決めて  
販売価格を自由（オ  
ープン）にしようと  
するものです。

小売希望価格で販  
売されているビール  
券はこの考えに沿わ  
ないということです。  
昭和44年から販売

が始まり、昨年の販  
売枚数は合計で一億  
五千枚強。ビール券  
は重たいビールを贈  
答品にできるように  
しビールの拡販に役  
立ったと、新聞の記  
事ではこうなってい  
ますが、ビール券誕  
生のほんとうの理由  
は他にありません。そ  
れは、すべての食品  
飲料がライトライト  
の方向へと流れ始め  
た時代でした。今で  
こそ「ドライビール」  
で一山当て、企業イ  
メージもアップした  
アサヒビールも当時  
は売り上げ不振のあ  
まりパツとしないビ  
ール会社でした。こ  
の会社が他社に先駆  
けて「瓶入り生ビー  
ル」を発売。ビヤホ  
ールのあの軽やかで  
まるやかな生ビール  
を家庭に運べたら売  
れるに違いない、と  
考えたわけです。当  
然生ビールは「生」  
ですから、中に酵母  
菌が生きていて、空  
気を遮断した低温の  
中でしか貯蔵できま

せん。瓶に詰めるな  
ど無謀なことです。  
そこでミクロフィル  
ターによるろ過で酵  
母菌を取り除き、熱  
処理することなく生  
の風味を残す工夫を  
しました。「アサヒ本  
生」の誕生です。

しかし当時は半年  
前の瓶詰月日のビー  
ルが食卓に上ること  
も多かつた時代。い  
くらミクロフィルタ  
ーを使っても品質を  
保持できるとは考え  
られませんでした。  
そこでこの会社は必  
要なときに必要な本  
数と引換えられる券  
として「ビール券」  
を考えだし販売を開  
始しました。ビール  
他社も同じようなビ  
ールを発売。2號3  
號の樽生などという  
ものも誕生。生ビー  
ルが家庭の食卓に載  
るようになり、当然  
各社もビール券も発  
売。各社の売り込み  
も激しさを増し、小  
売店の名入り印刷サ  
ービスなどで自社の  
ビール券の拡販に努

めました。あまりの  
熱心さに「小売店の  
系列強化だけだでな  
く他に目的があるの  
かも」などという憶  
測も飛び交いました。  
たとえば三越を初め  
とするデパートは大  
量に発行していた商  
品券が関東大震災  
と太平洋戦争で多く  
が灰となって大儲け  
したとか、交換され  
るまでの金利も大き  
いけど、新聞で「火  
事」が報道されるの  
たびに何枚かのビー  
ル券が燃えてるよね  
〜燃えたら全部ビー  
ル会社の儲けと言っ  
た話です。どうも小  
売店の考えることは  
昔も今もゲスでしょ  
うがありません。

清酒にも「共通清  
酒券」というものが  
あります。しかし清  
酒の値段も価格一律  
の級別がなくなつて  
15年近く経ち、メー  
カーの小売希望価格  
もまちまち。意味の  
ない「共通清酒券」  
になりつつあります。  
ビールの自由（オ

ープン）価格という  
考え方は日本酒にも  
別の理由が必要です。  
特に製品のレベルが  
画一的でない「地酒」  
と呼ばれる一部の高  
品質清酒は、酒蔵の  
酒造技術やその姿勢  
によつて品質に大き  
な差が出ています。  
適正な利益確保のた  
めに地元や灘の大手  
メーカーの価格に左  
右されない出荷価格  
の設定が必要です。

また流通の段階で  
も商品管理能力の優  
劣によつて酒質に顕  
著な差が生まれます。  
その観点から製造販  
売のどちらにも「自  
由価格」が必要です。  
全国一律の販売価格  
はほんとうの小売店  
を育てません。ほん  
とうの日本酒が造り  
続けられるためには、  
商品を知り抜き貯蔵  
方法を工夫する販売  
のプロが多く誕生す  
ること、そのために  
は各能力に応じた自  
由な価格設定が市場  
で認知してもらえら  
れることが必要です。